K. Kirişci and G. M. Winrow,

The Kurdish Question and Turkey: An Example of a Trans-state Ethnic Conflict.

London: Frank Cass, 1997, xvi + 237 pp.

高橋和夫

I　世紀末のパラドックス

世紀末の国際政治のパラドックスのひとつは，経済ユニットの拡大傾向と政治ユニットの分裂傾向のせめぎあいである。EU（欧州連合）や北米自由貿易圏などの経済圏の拡大が続いている。と同時に国家の分裂傾向も目立つ。ソ連邦やユーゴスラビアの崩壊，チェコ・スロバキアのチェコとスロバキアへの分裂などの例が直ぐに頭に浮かぶ。また，自治権の拡大の動きがイギリスのスコットランドやウェールズで，スペインのカタロニアで進んでいる。その上，独立を求める一部の動きがスペインのバスク地方で，さらには北イタリアで見える。目をアメリカ大陸に移すと，カナダのケベックの分離・独立運動がある。このようなマイクロ・ナショナリズムとも呼べるエスニック・グループの民族自決要求が目立ってきている。

こうした冷戦後の状況を背景として，「民族」，「民族自決」，「エスニシティー」，「エスニック・グループ」，「マイノリティー」などの概念に関する諸理論を見直し，トルコのクルド問題をその中に位置づけようとした意欲作が，表題の本書（仮訳『クルド問題とトルコ：国境を越えるエスニック紛争の例』）である。著者は，イスタンブールにあるボスポラス大学の2人の助教授である。その理論面への関心が，副題の「国境を越えるエスニック紛争の例」に込められているようだ。

2人の著者は，本書において3つの目標を追求している。第1に，すでに述べたように広い意味での民族問題の理論の整理とトルコのクルド問題のその中への位置づけ，第2に，トルコのクルド問題そのものの叙述，そして第3に，トルコのクルド問題解決のための提案である。全8章のうちの最初の2つの章が理論面の記述に，最後の2つの章が政策提案に，そして間の4つの章がクルド問題の記述そのものに，それぞれ割り振られている。すなわち，他のエスニック紛争の理論的研究からトルコのクルド問題解決への糸口を探ろうとする構成になっている。

以下に目次を掲げる。

序　章
第2章　マイノリティーの権利と民族自決
第3章　クルド問題の淵源
第4章　トルコにおけるクルド問題の展開
第5章　クルド問題とトルコにおける最近の進展
第6章　クルド問題の国際的次元
第7章　クルド問題解決の可能性
結　論

II　クルド問題の展開

序章とその次の章でクルド問題とマイノリティーに関する議論と理論を紹介すると，第3章以降で記述はクルド問題そのものへと進む。第3章ではその起源が，そして第4章では1980年代までの展開が，そして第5章では最近の情勢が語られる。章立てに従って第3章以降の議論を追ってみよう。

第1次世界大戦まではクルド人の大半はオスマン帝国ならびにカージャール朝ペルシアの支配下にあった。第1次世界大戦後に中東の地図が塗り替えられ，カージャール朝ペルシアは1920年代の半ばまでにパフラヴィー（パーレビ）朝にとって代わられた。オスマン帝国のクルドの居住地は，トルコ共和国，イラク，シリアに分割された。しかもイラクはイギリスの，そしてシリアはフランスの委任統治下に入った。しかし，そのどこにもクルド人の国はなかった。なぜクルド人は，オスマン帝国崩壊の混乱期に自らの国を樹立できなかったのだろうか。それが第

3章のテーマである。

イギリスとフランスの駆け引きなどの外交史を織り交ぜながら，クルド人が建国できなかった歴史がこの章で語られる。クルド人が大同団結できなかったことに，そしてクルド人の民族主義の未成熟さに，その理由が求められている。遅れてきた民族主義者であるクルド人の悲劇が浮き彫りにされている章でもある。こうした議論自体が，クルドの民族主義の萌芽がすでに19世紀に見られるとするケンタッキー大学のロバート・オルソン(Robert Olson)の説に対する反論となっている。

第4章では，トルコのクルド問題の展開へと叙述が進められる。トルコにおけるクルド問題は逆から見ればトルコ問題である。小アジア半島が，つまりアナトリアが，イスラム教徒というアイデンティティーのもとで「トルコ人」と「クルド人」が共存していたオスマン帝国の一部から，トルコ人の国としてのトルコ共和国の主要部分になった時にクルド問題が発生した。オスマン帝国の末期までは，そもそもトルコ人とかクルド人という自己認識（アイデンティティー）を持った人間はいなかった。しかしトルコ民族主義がトルコ共和国の統一理念として採用された時に，そしてその理念に基づいた中央集権国家の建設が始まった時に，トルコ東部のクルド部族の反乱が続発することとなる。トルコ民族主義の台頭への反応として，クルド民族主義も台頭したわけだ。

しかしトルコ共和国政府は，トルコにはトルコ人しかいないとのフィクションのもとで，マイノリティーの同化政策を推進した。つまり国家建設と同時に「トルコ人」を作り出す事業が政治の力で推し進められた。そして1950年代までに，部族を率いていたクルドの伝統的なエリート層は，弾圧され排除されるか，あるいはトルコの政治システムの中に取り込まれてしまう。クルドというアイデンティティーを主張しない限り，システムはクルド人の立身出世を妨げない。このシステムの下でトルコは近代化を経験してきた。

ところが，この近代化が伝統的なエリートに代わって新しいエリートを生み出した。都市化と教育の普及が，その原動力であった。クルド人としてのアイデンティティーを主張するエリートたちの誕生であった。そして，クルド人としての意識がクルドの大衆の間にも広がり始めた。トルコ共和国の政治システムは，トルコ人以外のアイデンティティーを主張する人々の挑戦に直面している。その代表例がPKK（クルディスターン労働党）である。

III　PKK

このPKKの動きをひとつの焦点とする最近のクルド状勢の解説が第5章である。議論はトルコのクルド人地域の社会・経済状況の記述から始まる。最初に問題になるのがトルコにおけるクルド人口の確定である。各種の推定値に大きな開きがある。1000万以下とする推定もあれば，2000万との主張もある。誰をクルド人とするか，トルコ人とクルド人の2つのアイデンティティーを同時に保持する人々をどう分類するかなど，アイデンティティーという概念の複雑さを思い知らされる数値間の開きである。

次にクルド人の居住するアナトリア東南部の経済的な遅れが語られる。非識字率の高さ，自動車保有台数の少なさ，所得の低さなどの数字が列挙される。この地域の平均所得は，一番豊かなエーゲ海沿岸地域の3分の1にも届かない。トルコのクルド問題の背景である。

そしてトルコからの分離・独立を目標に掲げたPKKのゲリラ活動が1984年に始められた。トルコ軍とPKKのゲリラの間で今日まで戦いが続いており，犠牲者の総数は2万人を超えている。10万単位の兵力をトルコ軍はクルド人地域に張り付けており，しかも毎年のように春にはイラクへの越境作戦を敢行している。PKKがイラク北部にも拠点を持っているからである。トルコ政府にとって重い財政負担である。軍は，村民を武装させ軍に協力させて，PKKを農村部から締め出そうとしている。逆にPKKは，軍協力者に報復して政府の支配を断ち切ろうとしている。結局，村落の多くは昼には軍に支配され，夜にはPKKに支配される有様である。そして，戦闘の巻き添えとなって数千名を超える民間人が犠牲

になってきた。

という状況であれば，PKK とトルコ軍の戦いを避け多くのクルド人が故郷の村落を離れているのは当然かもしれない。行く先は，ディヤルバクル，アンカラ，イスタンブールなどの都市である。その結果，たとえばイスタンブールの人口の3分の1はクルド人と言われるほどである。つまりイスタンブールは，世界で一番多くのクルド人が住んでいる都市となっているわけだ。そしてクルド人は都市部で最底辺を形成している。こうした人々を支持基盤として成長してきたのが，今年になって憲法違反との判決を受けて解散を命じられたレファー党（福祉党／繁栄党）である。軍の PKK 掃討作戦がクルドの移動という現象を引き起こし，それがトルコの国内政治に跳ね返っている。

その社会学的なインパクトも注目される。都市部への移住によってトルコ人とクルド人の接触の増加と両者間の結婚，あるいは都市化による出生率の低下などで，クルド人の，もっと詳しく言えばクルド人としての強い意識を持った人口の増加率の低下が見込まれると本書は予想している。その意味は大きい。なぜならば，クルド人の出生率の高さに注目し，2～3世代のうちにクルド人が数の面でトルコ人を上回るようになるだろうとの予測があるからである。つまりトルコ共和国においてトルコ人がマイノリティーに転落するだろうとの観測があるわけだ。しかし，都市化がそれを阻むだろう。少なくとも遅らせるだろうと本書は主張している。

この章は最後にトルコの各政党が，クルド問題にいかに対応してきたのかを論じている。ポイントは2つである。ひとつは，故オザル大統領の進めた漸進的なアプローチへの高い評価である。オザルは，自分がクルドの血を引いていることを公に認めたのをはじめ，湾岸戦争後にはイラクのクルド人指導者と会談するなど，トルコ世論をクルド問題の認知へと導いた。また文化的な表現の自由を与えるなどクルド人への譲歩を行った。

第2に，しかしながら，オザルの逝去以降は，クルド問題を解決しようとの政治的指導力を発揮した政治家はいない。一部の政党の試みにもかかわらず，どうしてもクルド問題で強硬な勢力の，特に軍と治安当局の反対を突破できないからである。また国家の一体性を脅かす（とみなされる）あらゆる行為を禁じる法律の存在が，クルド人の意思を合法的に議会に反映させることを妨げており，トルコの議会制度がこの面では不十分であることが指摘されている。PKK の活動が，クルド問題の解決の機運を高める触媒となっている。だが同時に PKK との戦闘が，軍部をはじめ各勢力の態度を硬化させている。

本章は，時には政府寄りと思わせながら，また時には反政府寄りとも見える議論にも触れながら，微妙なバランスを維持することに成功している。結果として双方に目配りした行き届いた記述となっている。当然のことながら一方の立場を代弁することによって出てくる歯切れの良さは望むべくもない。しかし，大胆な議論で一刀両断にするほど現実が単純でない以上は，不可避かつ必要なバランス感覚であろう。

Ⅳ　トルコからの視点

次の第6章が問題の対外的な側面の解析に充てられている。なぜならば，第1に，トルコにおけるクルド問題の特徴は，クルド人が国境を越えて生活していて，トルコ国内の状勢を見ているだけでは，その全体像をとらえきれないからである。すでに見たようにクルド人の居住空間はトルコのみならずイラク，イラン，シリアに広がっている。そして一部は，アルメニアとアゼルバイジャンに生活している。特に重要なのはイラク北部地域である。

イラク北部のクルド人地域は湾岸戦争後にバグダッドのイラク中央政府の支配を離れているが，その動向はトルコのクルド問題に直接大きな影響を与えている。ひとつは，PKK がこの地域に浸透しており，その PKK を追ってトルコ軍が越境攻撃を繰り返しているからである。この点については既述した。第2に，この地域のクルド人が独立を達成するのではないかと懸念する諸国が，すなわちトルコ，イラン，シリア，そしてイラクが，この地域を巡って複雑な駆け引きを繰り広げているからである。またト

ルコがこの地域に領土的な野心を抱いているのではないかとの疑念を他の3国が払拭できないからでもある。

トルコのクルド問題の対外的な側面のもうひとつはヨーロッパとの関係である。EU への加盟を申請しているトルコに対し，EU 諸国は，トルコではクルド人の人権が十分に保障されていないことを理由のひとつとして，これに否定的である。人権を巡る EU 側のトルコ批判に対しては，クルドの人権を言いわけとしてトルコ共和国の分裂を策すヨーロッパ人の陰謀ではないかとの根強い猜疑心がトルコ人の心に存在することなどが指摘される。PKK の執拗なゲリラ戦を鎮圧するためには，人権問題には若干目をつぶらざるを得ないとの認識がトルコにあるからだ。オスマン帝国期以来のヨーロッパに対する不信の感情が猜疑心の背景にあるのは言うまでもない。

こうしたトルコからの視点への配慮が，本章ばかりでなく本書全体を貫いている。そして，それが本書の仕上がりを欧米での議論とは違った肌触りとしている。

また EU の冷淡な態度とは対照的に，アメリカのトルコ重視の姿勢が語られる。それは，アメリカは対中東，対中央アジア戦略の拠点としてトルコを認識しているからである。トルコを欧米から離反させることは得策ではない。そうした計算から，トルコへの配慮を求めるアメリカの EU への働きかけが続けられている。

V　多文化主義と民主化

こうしてトルコのクルド問題に内外から光をあてた2人の著者は，いよいよ次の第7章と第8章で問題解決のための提案を開陳している。本書の白眉であり，クライマックスである。ここに至って，本書冒頭の理論に関する議論と直前のクルド問題自体の記述の融合が試みられる。

クルド人の多くが都市部へ移住しトルコ人と混じって生活している現状を踏まえ，クルド地域の分離などの議論を排除し，2人の著者は多文化主義による解決を主張している。これは，それぞれのエスニック・グループが自らの文化を守りつつ他の文化を尊重しつつ共存するシステムである。EU 諸国が実現に努力している制度である。つまりトルコ共和国をトルコ「人」の国からトルコ「市民」の国に変え，全てのエスニック・グループが平等な立場で政治に参加するシステムへの移行を呼びかけている。

かつてオスマン帝国内では，人々のアイデンティティーは宗派によって規定され，それぞれの信者集団が高度の自治を保持しながら共存していた。これをミッレト制度と呼ぶ。しかし現在のトルコが目標とすべきは，宗派ではなくエスニシティーによって規定された新しいミッレト制度の構築である，との主張である。

現在の行き詰まった状況と，そうした多文化の共存状況を結ぶのは，トルコの民主化の深化という細い道筋があるのみである。トルコ共和国の民主制度の不十分さは良く指摘される。またクルド人の間においても民主化の伝統が深く根を下ろしているわけではない。しかもクルド問題の解決には民主化が必要であるが，クルド問題の存在それ自体がトルコの民主化の一層の進展を阻害している。少なくとも軍は，それを言いわけにしている。だが2人の著者は，この道筋がいかに長いかを十分承知しながらも，あえて困難な解決策が結局は近道であることを訴えている。この提案を単なる研究者の理想論と受け取るか，あるいは理想論こそが結局は現実論であると解釈するかは議論の分れる点であろう。

トルコのクルド政策を批判することは容易だが，解決策を提示することは困難である。この困難な課題に正面から取り組んだ両著者の真摯な知的営為に敬意を表さずにはいられない。トルコ政府の表面上のかたくなな態度にもかかわらず，本書に反映されているようにトルコ国内では時には公に，時には私的な形でクルド問題を巡って真摯な議論が繰り広げられている。クルド問題を巡る暗い状況の中での希望の灯である。

（放送大学助教授）